木材加工の最前線!
株式会社ミロクテクノウッドの現場に迫る

ミロクテクノウッドでの仕事

私たちは今回、木材加工の最前線である「ミロクテクノウッド」を取材した。工場に入るとまず目に飛び込んできたのは、整然と並ぶ多くの機械と、木の香りに満ちた広い作業場だった。ミロクテクノウッドは南国市篠原にあるミロクグループの敷地内にあり、さまざまな設備を備え、木の新たな可能性を追求する研究開発型メーカーである。

同社は、木のぬくもりと現代技術を融合させた製品づくりで高い評価を受け、【第5回ものづくり日本大賞 優秀賞】を受賞している。特に「純木製ハンドル」は代表的な製品で、自然素材の美しさと精密な加工技術、職人の感覚が一体となって作られている。

使用される竹は、防虫・防カビ処理を施したうえで乾燥を繰り返し、最適な含水率に調整される。国内で工業用竹を安定供給できるのは高知県だけだという。最初の工程「積層接着」では、乾燥させた孟宗竹を薄板状の「ラミナ」に加工し、それを11枚重ねてプレス機で圧着する。これにより、しなやかさと耐久性を兼ね備えた積層材ができる。

続く「ルーター加工」では、ウォールナットやメイプルなどの高級木材、または積層竹材を削り出して部品を製作する。素材に応じて刃具や回転数を微調整する必要があり、熟練工の経験がものを言う。削り出した木ピースを金属芯金と接着したのち、「カービング」によって立体的な形状を仕上げる。機械加工と手作業の両方を使い分け、手になじむ形を丁寧に整えていく。

その後の「生地研磨」では表面を滑らかにし、「目止め」で導管を埋めて塗装の下地を整える。塗装はクリアやカラー塗料を重ね塗りし、間に「空研ぎ」を挟みながら仕上げる。最終段階では職人が一本一本を手作業で確認し、塗りムラや異物を丁寧に取り除く。

完成した木部はウレタン成形で補強され、「革巻き」工程へ。天然革は部位によって伸びや風合いが異なるため、熟練工が感覚を頼りに調整する。最後に六種類の部品を組み立て、厳しい検査を経て出荷される。こうして竹や木材は、職人の手で磨かれながら「純木製ハンドル」として生まれ変わる。

私たちが特に印象を受けたのは、最終的な品質確認を必ず人の目で行っている点だ。どんなに機械化が進んでも、人の感覚が最後の仕上げを支えている。工場では機械と人が互いの得意分野を生かし合い、高い精度と安全性を実現していた。

ミロクテクノウッドで働く良さ

従業員の方は、「自分の考えを形にして仲間と協力し、製品として世に出るときに大きなやりがいを感じる」と話していた。自らの手で生み出したものが社会に役立つことは、ものづくりに携わる人の誇りであり、私たちが行っているギター演奏や制作にも通じる。

また、同社は高知県や南国市などと協定を結び、竹資源を活用したプロジェクト「BAMBOO+®」を進めている。これは、放置竹林の問題を解決しながら、石油製品に代わる素材として竹を再利用する取り組みだ。環境への配慮と地域貢献を両立させている点も、この会社の大きな魅力である。

さらに、多様な背景を持つ従業員が活躍していることも印象的だった。高専や工業高校出身者を中心に、Iターン・Uターンによる移住者、全く異なる業種からの転職者も在籍しているという。それぞれの経験や考え方の違いが新しい発想を生み、挑戦的で開かれた社風を支えている。

このように、社員の熱意や地域との連携、環境への意識が一体となり、ミロクテクノウッドの「ものづくり」は単なる製品開発にとどまらず、社会全体を豊かにする力になっている。

ハイスクール
高知新聞
ものメッセKOCHI2025
第14回高知県
ものづくり総合技術展
2025年(令和7年)
11月13日
木曜日
発行所
高知県立
高知国際高等学校
高知国際高校ギター部
協力
株式会社高知新聞社

号外

取材の様子はコチラ!
ものメッセ
KOCHI2025